

## 「森林を愛す ―土砂災害を防ぐには―」

神奈川県 逗子市立逗子中学校 3年 <sup>ふちわき</sup> 潤脇 <sup>けいご</sup> 慶伍

土砂災害——。僕にとってはあまり縁のない言葉。テレビの中だけの言葉だった。

ところが去年の9月、土砂災害を身近に感じる出来事があった。京急線の脱線事故である。列車が、線路に流れ込んできた土砂に乗り上げてしまったのだ。事故現場は、普段からよく利用する区間だった。脱線した列車に乗っていたかもしれない。そう思うとぞっとし、土砂災害は他人事ではないと痛感した。

今、目の前に「土砂災害ハザードマップ」がある。僕が土砂災害の話をしたら、母が持ってきてくれたのだ。東日本大震災のあと、東南海・南海地震を想定した津波ハザードマップはよく耳にしたが、土砂災害ハザードマップの存在には気がつかなかった。どんなものだろう。見てみると、それは僕が住んでいる市の全体の地図のところどころに色が塗られているものだった。

「ふうん。これが土砂災害ハザードマップか。」

初めはこの程度にしか思っていなかった。しかし、あることに気がついてからは、軽く考えることはできなくなった。僕の住んでいる家のすぐ近くまで、茶色で塗りつぶされているのだ。茶色く示されていたのは、土砂災害警戒区域——土砂災害が起こる可能性のある区域——だった。つまり、これは僕の家も土砂災害にあう可能性があるということだ。京急線の脱線事故を知って土砂災害への恐怖を覚えたが、今回受ける衝撃はそんなものではなかった。

「どうすればいいのだろう。」

僕の頭は、混乱状態に陥っていた。

東日本大震災のあと、家族で話し合ったことがある。地震のときの家族の集合場所についてだ。それまでは、平地の広い公園にしていたのだが、津波の可能性を考えて家から歩いて5分ほどの山に逃げることになっていた。

ところが今回、その山のほぼ全域が土砂災害警戒区域に指定されていることに気がついた。津波から逃げるにしても、山では地震の揺れで土砂災害が起こっているかもしれない。

これについて家族で話し合いはしたが、解決策は出ず、地震の際は従来通り山に逃げることになった。ただ、家族で土砂災害のリスクを共有できたのは良かったと思う。

僕はホタル部の部長である。恐らく他の学校にはない部活だ。ホタル部は「ホタルを見ることが出来る環境をつくり、維持していく」という指針に沿って活動している。具体的には、校舎周辺の清掃活動などである。

活動の中で、みんなが特に楽しんでいるものがある。月に1回程度の自然観察会だ。僕の通う学校は緑に囲まれている。学校から裏手に3分も歩けば、山道の入り口に行きつく。この環境を活かして自然観察をするのだ。

学校に集まった時はがやがやとくだらない話で盛り上がっているが、山の中に入るとそれが止む。山の特別な雰囲気、全員が感じとるのだ。

空気が清らかだ。冷たく、またきれいでもある。本当に透明な空気に、体が包み込まれていくように感

じる。これは木々のおかげだ。木々の大切さを感じる一瞬だ。昔からそこにある木々が、優しく僕たちを見守っている。

全国から、そんな豊かな森林が失われているという。森林自体が減っていることは話題になっている。さらに最近では「荒れた森林」が多くなり、深刻な問題になっているという。もともと林業が盛んだった日本だが、外国産の安い木材の流入で市場が縮小し、利益が出ずに放置された森林が多いようだ。

森林は「緑のダム」として水をろ過し、きれいな水を生み出してくれる。役割はそれだけではない。土砂災害をも防いでいるのだ。

そんな大切な森林が失われたり、荒れたりしているのだ。このままでは、森林という素晴らしい空間がなくなるだけではなく、土砂災害がさらに増えてしまうのではないかと危惧している。

では、どうすればいいのか。手段はいくらでもあると思う。植林でもいい、荒れた森林の整備でもいい。また、身近なところでは安全な避難所までの経路を確認したり、避難時の持ち出し品を用意したり、警報・注意報に注意するなど、様々なことができるだろう。

だがそれだけではだめだと思う。もっと森林を愛さなければならないと思う。僕たちホタル部のように森林を歩き、森林のことを考えれば、土砂災害を防ぐ要、森林の大切さを実感できるはずだ。そうすれば、自然に森林のことを考えた行動が伴ってくると思う。

森林は敵ではなく、味方である。森林を敵対視し恐れながら暮らすのではなく、森林を愛し、土砂災害などから守ってもらって安心な生活ができればと願っている。